

地 域 再 生 計 画

1 地域再生計画の名称

人・物・情報が活発に行き来する交流拠点都市づくり

2 地域再生計画の作成主体の名称

宮崎県、延岡市

3 地域再生計画の区域

延岡市の区域の一部（延岡区域）

4 地域再生計画の目標

本市は、東京から約1,365km、福岡から約324kmの九州の東端、宮崎県の北部にあり、宮崎・大分・熊本の中間地点に位置している。古くは譜代大名内藤家の城下町として栄えてきたが、近年においても県北地域における教育文化・産業経済の中心としての役割を担ってきており、大正12年の日豊本線開通により宮崎県北地域における物産の集散地としての経済的地位を確立するとともに、同年、旭化成（株）の前身である日本窒素肥料（株）延岡工場が建設されたことに伴い、東九州随一の工業集積地として発展を遂げてきた。

一方で、西に祖母傾国定公園の山並みを望み、東にリアス式海岸を有する日豊海岸国定公園が広がり、清流として名高い五ヶ瀬川が市街地を貫流する風光明媚で自然豊かな都市であり、産業と自然や歴史・文化が調和した都市となっている。また、恵まれた自然環境や温暖な気候の中で、マラソンや柔道等において数多くのオリンピック選手を輩出するなど、アスリートタウンとしても知られている。

しかしながら、昭和60年頃から人口の減少が始まり、その後に経済のグローバル化やバブル経済の崩壊などの影響もあって企業の生産活動が停滞し、工業における製造品出荷額は平成2年をピークに減少傾向をたどっている。また、雇用情勢や個人消費も低迷するなど、厳しい経済情勢が続いており、都市の活力の低下が懸念されている。そのほか、輸入の増加による価格の低下や高齢化、後継者不足などの課題により、農林水産業においても停滞が続いている状況にある。加えて、高速道路の未整備というハンディキャップのみならず、他地域との交流基盤として重要な役割を果たす国道や県道、市内幹線道路についても交通ネットワークとして機能するには至っておらず、宮崎・大分・熊本の中間地点という地理的優位性を活かしきれていない現状がある。

また、少子高齢化の進展や地方分権の推進など、地方を取り巻く環境が大きく変化し、都市間競争の激化が予想される中、これまで以上に地域の特性や優位性を活かした

まちづくりが必要となっている。

現在、本市においても、東九州自動車道と一体的に機能する「国道10号延岡道路」が平成17年4月に一部供用開始となるなど、高速道路網の整備が目に見える程進んできており、今後は、国内外の社会情勢の著しい変化に伴い、人・物・情報の往来の活発化を通して交流人口の拡大を図り、地域の活性化を高めていく必要がある。

そのため、本市では、今以上に個性的で豊かな延岡の再生と創造をめざし、「交流拠点づくり」、「産業拠点づくり」、「交通ネットワークづくり」という三つの基本目標のもと、大学を活かしたまちづくりやアスリートタウンづくり、クレアパーク延岡の整備充実と企業誘致の推進、道路ネットワーク機能の強化等、活力ある地域づくり施策に取組「人・物・情報が活発に行き来する交流拠点都市」の実現を図っていくこととする。

(1) 交流拠点づくり

本市は平成6年に近隣の7市町村とともに「宮崎県北地方拠点都市地域」に指定され、地域のポテンシャルを活用しながら、新たな産業システムや都市機能等の整備に取り組んでいるが、広域交流拠点と定住拠点の形成に向け、基本計画の中で「延岡市街地北部拠点地区」、「歴史・文化・交流拠点地区」、「産業・物流拠点地区」等において、商業機能や文化・交流機能の集積、若者定住対策を実施することとしている。中でも「産業・物流拠点地区」の高速道路ジャンクション建設予定地付近において、工業団地ゾーンや学術・研究ゾーンを配置した大規模複合産業団地「クレアパーク延岡」の整備を進めている。

学術・研究ゾーンには、平成11年4月に、交流拠点施設として「九州保健福祉大学」（3学部8学科定員2,080名）が公私協力方式により開学した。開学後は、約2千名の学生による定住人口の増加や多くの経済効果がもたらされているほか、学会・シンポジウムの開催による交流人口の増加など、まちの活性化の動きが見受けられるようになっており、市では「大学を活かしたまちづくり計画」の中で、薬草栽培や、海洋性バイオマスを活用した機能性食品の開発など、産学官連携による新たな産業起こしに取り組ながら、計画のステップアップを図っていく。

併せて、魅力ある地域づくりを進めるため、江戸時代からの歴史・文化を活かしたまちづくりや、数多くのオリンピック選手を輩出したアスリートタウンとしてのまちづくりを進め、交流人口の拡大を図る取組も進めていく。

また、本市は宮崎県北地域の中心都市として、15市町村との連携や、宮崎・大分・熊本の3県にまたがる77市町村から成る九州中央地域連携推進協議会の活動等により、交流基盤の整備や交流活動の促進に取り組んでいる。本格的な少子高齢社会、人口減少社会が到来しようとする中、地域の活性化を図るためには産業経済や文化面における広域連携を進めていくことが必要不可欠であり、今後とも、交流ネットワークづくりを進めながら、多面的な活動を促進していく。

(2) 産業拠点づくり

本市では、高速道路の整備に伴い、前述したように平成6年に指定された「宮崎県北地方拠点都市地域基本計画」の中で、大規模産業複合団地「クレアパーク延岡」の建設を進めることとしている。計画では工業団地、流通団地、学術・研究ゾーンなどの4つのゾーンに分け、企業の誘致や流通部門の整備を図ることとしているが、このうち、工業団地ゾーンにおいては、現在、第1工区（開発面積約5.67ha）において地元企業1社が操業、2社が建設を進めている状況であり、残りの用地についても分譲を行っている。今後は第2工区の整備を行うこととともに、企業立地に向けた取組を積極的に進めることとしているが、高速道路の整備に伴い「クレアパーク延岡」の立地条件は確実に向上することが見込まれることから、産業構造の変化や企業ニーズに対応した優遇措置の充実も図り、企業誘致の新たな展開及び地場産業の育成を推進していく。

また、農林業については、農業粗生産額も平成7年の約52億円に比べ平成14年には約39億円と減少しており、今後の振興を図っていくためには、長期的課題である経営体質の強化や担い手対策に取り組むとともに、「空飛ぶ新玉ねぎ」に代表されるようなブランド化を促進し、その販路拡大や、販売拠点施設の整備など販売体制づくりを進めていく。また、森林整備計画に位置づけられた資源の循環利用林としての機能が発揮されるとともに環境への負荷にも配慮しながら広域農道や農免農道、林道など生産基盤の整備を総合的に推進していく。

(3) 交通ネットワーク都市づくり

本市では、南北に縦断する国道10号（宮崎市・大分市に通じる）と、東西に横断する国道218号（高千穂町・熊本県方面に通じる）が基幹道路であるが、これらを結ぶ道路網の整備が遅れているため、市内中心部を経由せざるを得ず、朝夕の通勤時に限らず交通渋滞が生じている状況がある。人・物・情報の交流の促進をめざす本市にとって、国道や延岡インター線等にアクセスする道路ネットワークの構築は喫緊の課題となっている。

そのため、現在、延岡市を南北に縦断する形で建設中である広域農道と幹線市道を一体的に整備することにより、農業の近代化及び農畜林産物輸送の合理化、農村環境の改善を図るとともに、市内幹線道路の渋滞の解消や、広域農道に近接する大学・高等学校への通学路の確保、市内各地から延岡ジャンクション・インターチェンジ、西階運動公園、県立延岡病院等の公共施設にリンクする道路ネットワーク機能の強化を図り、安全で快適な生活都市を構築していく。

(目標1) 交流人口の増大

(合宿・イベント・コンベンション等による交流人口：450,000人→500,000人)

(目標2) 企業誘致の推進

(企業誘致立地推進条例の適用による指定工場等数：69工場→80工場)

(目標3) 農畜林産物輸送の合理化

(延岡市北部地区から南部地区までの移動時間短縮：10分)

(市場への時間短縮 10%)

(目標4) 市内各地から延岡ジャンクション・インターチェンジやクレアパーク延岡、九州保健福祉大学等へのアクセス改善

(延岡市北部からIC等への時間短縮5分)

(目標5) 安全な通学路の確保と時間短縮

(延岡市西部から延岡商業高校及び延岡学園高校への通学時間短縮5分)

5 目標を達成するために行う事業

(5-1) 全体の概要

人口10万以上の都市で、高速道路のインターチェンジまで1時間以上かかる都市は本市を含め全国でも数箇所しかなく、これまで本市発展の大きな妨げとなってきた。しかし現在、その姿が目に見えるほど順調に整備が進んできている。また、高速道路の整備と併せて、四年制大学の誘致や大規模産業複合団地「クレアパーク延岡」の建設等、地域活性化のための取組を進めてきたが、今後は地方分権の推進や少子高齢化の更なる進展が見込まれることから、これまで以上に活力と魅力にあふれた地域づくりを進めていくことが必要不可欠となっている。

このため、宮崎・熊本・大分の中間地点という地理的優位性を最大限生かしながら「人・物・情報が活発に行き来する交流拠点都市」の構築をめざし、以下の事業を総合的かつ一体的に実施する。

まず、道整備交付金を活用する事業として、広域農道沿海北部地区は昭和53年に策定された広域営農団地整備計画に位置付けられた基幹的農道で(昭和58年事業計画確定)、全延長30kmを整備するものである。このうち延岡市桜ヶ丘町から祝子町間の延長1,625mの整備と、この広域農道に接続する延岡市の市道として昭和58年に市道認定された桜ヶ丘17号線と、松山宇和田線を一体的に整備する。これにより、延岡市北部地区から南部地区までの移動時間を短縮し農畜産物の輸送合理化を図るとともに、一大住宅団地である桜ヶ丘町や稲葉崎町から延岡市西部にある運動公園やインターへのアクセス時間の短縮、さらに、延岡市西部にある住宅地から北部に位置する県立延岡商業高校や私立延岡学園高校へ通う高校生の安全確保と時間短縮を図る。また、森林整備計画に記載された林道「津々良小野線」の開設、「下三輪線」・「鹿狩瀬行滕線」の舗装を実施し、安全な通行を確保するだけでなく、市の主要観光施設及び、アースデイ等イベントのアクセス道路としての機能を果たし、さらに、災害時等の河川への汚濁流入防止及び、林産物の市場への搬出時間の短縮を図る。

また、その他の事業として、大学を活かしたまちづくり・広域的地域づくりの推進・工業の振興・農林業の振興・関連する市道網の整備を同時に展開していくことで「人・物・情報が活発に行き来する交流拠点都市」の構築をさらに強めていく。

(5-2) 法第五章の特別の措置を適用して行う事業

道整備交付金を活用する事業

[施設の種類(事業区域)、実施主体]

- ・市道(延岡市)、延岡市
- ・広域農道(延岡市)、宮崎県
- ・林道(延岡市)、延岡市

[事業期間]

- ・市道(平成17~19年度)、広域農道(平成17~21年度)
- ・林道(平成20~21年度)

[整備量及び事業費]

- ・市道540m、広域農道1,625m、林道3,829m

・総事業費

市道	120,000千円	(うち交付金	60,000千円)
広域農道	3,517,500千円	(うち交付金	1,758,750千円)
林道	180,000千円	(うち交付金	76,666千円)
合計	3,817,500千円	(うち交付金	1,895,416千円)

(5-3) その他の事業

地域再生法による特別の措置を活用するほか「人・物・情報が活発に行き来する交流拠点都市」の構築を目指し、以下の事業を総合的かつ一体的に行うものとする。

① 大学を活かしたまちづくり

九州保健福祉大学(3学部8学科定員2,080名)は地域づくりの核となる施設として公私協力方式により誘致したものであるが、今後、大学の人的資源を活用し福祉先進都市づくりを進めるほか、薬学部を中心に現在進められている薬草栽培や機能性食品開発などの産学官連携による新たな産業興しを推進する。

② 広域的地域づくりの推進

県北15市町村から成る宮崎県北部広域行政事務組合のふるさと市町村圏基金を活用しながら、広域的地域づくりを推進するとともに、8市町村からなる宮崎県北地方拠点都市地域の基本計画に基づく広域事業を展開する。

③ 工業の振興

大規模産業複合団地「クレアパーク延岡」の建設による高度な産業拠点の形成を目指すとともに、引き続き本市の工業集積を生かすため、産業構造や企業ニーズに対応した優遇措置を充実させ、企業誘致の推進を図る。

④ 農林業の振興

競争力のある経営の確立を図るため、消費者の品質・安全志向に対応した高品質農畜産物の生産・流通・販売体制づくりを進めるとともに、本市の特性を生かした農畜産物のブランド化を促進し、その販路拡大や販売拠点施設の整備を行う。

⑤ 関連する市道網の整備

高速道路の供用開始に伴う交通量の増加に対応するため、現在進めている延岡 J C T ・ I C へのアクセス道路となるその他の幹線市道の整備を継続して行う。

6 計画期間

平成 1 7 年度 ～ 平成 2 1 年度

7 目標の達成状況に係る評価に関する事項

4 に示す地域再生計画の目標については、事業完了後の供用開始後に数値目標達成の調査を行い、結果を公表する。

8 地域再生計画の実施に関し当該地方公共団体が必要と認める事項

特になし